

伝えたい、伝統芸能の心

高森町伝統芸能連絡協議会会長 本田 研一

弥生時代中期から後期にかけての遺跡とされる、幅・津留。

それは石器から鉄器使用とされる時代を追っての遺物ばかりか、子供達の墓の多さから見ると、当時九州でも相当規模の集落であったと思われます。

下段の南阿蘇村側から見ると、遺跡から高台になり、津留そして南在へと続きます。

ここにある白水市下神社の鳥居が、その遺跡群に目をやるような位置にあり、津留より降りていくと、それは守護神であったかのように映ります。

当時日本の人口比から、ここには都市をも思わせる大規模な集落が存在していました。

西方、南阿蘇村側よりおきた集落が、時間の変化と共にやがて拡大し、そして鉄器使用に至るその順序を追った過程が、この遺跡の特徴でしょう。

冬野川が流れ、そして池もあり、

古代よりその人口をまかなうに、重要な水資源でありました。生活の基本といえる、水資源を確保した先住民といえる人達が、今日の高森そして南阿蘇を形成した、最も大きな要因でしょう。

弥生時代の後期、日本列島の何処に居たのか諸説いきかう女王「卑弥呼」。

今までは「豆塚」の存在を単なる象徴的なものとしか思っていなかった私に、幅・津留遺跡の発見はとても驚きでした。

それは、この遺跡の周辺からまだ現れていない、大人の墳墓等から思うに、豆塚等が突然現れたのではなく、この遺跡との関連がより濃いのだと思えます。

豆塚等は、何時ごろ造られたのかまだ解っておりません。

この塚に登り頂上から見ると、中央部がやや窪んでおり、長方形の形に見えます。川を隔てて見る色見の古墳は円墳の形をし、豆塚より大き

く見えます。この二基の古墳が、何時ごろのものかまったく手がけられておらず、そして遺品等の発見も聞いておりません。

やさしく高森の象徴的な存在である豆塚等。幅・津留遺跡指導者の墓地であるのかも知れません。

現在遺跡関連の事務所上手は、歴史を追ってゆくと、弥生時代から古墳時代へと変わってゆく過程を現わす出土品があります。

弥生時代をもつて終わったとされる幅・津留遺跡。それはやがて来る、新しい歴史をもつて、津留、南在、

上在そして南阿蘇各地へと移動していったのだと思います。

高森中央小学校横手、昭和二十三年高森中学校新設工事中に、横穴古墳が発見されます。出土品の一部を含む蔵寺で見える事が出来るのですが、それは相当な権力者であったことがわかります。出土品は金環・馬具・鉄刀等です。

ここに建設された高森中学校は、十余年しか使用されておりません。多分にそれは、増えすぎた生徒数に、教室とか敷地が足りなくなつたからでしょう。

しかし記憶でしかないのですが、当時は先生の当直制度があり、毎日だれかの先生が泊まられておりました。その度に、怖い出来事と遭遇した話を聞きました。

それが理由で現在地に移転したとは思いたくないのですが。

さまざまな出会い。二十余年を経て明らかにされようとしている幅・津留遺跡。

壮大な夢空間ともいえる、私達の先人が残した遺跡群。吉野ヶ里遺跡をしのぐ規模だそうです。また土に埋めるのか、この遺跡の保護をどうしたらいいのでしょうか。



▲幅・津留遺跡（高森・津留）